



TITLE:

十六ー十八世紀東アジア多国間関係史の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

木村, 可奈子

CITATION:

木村, 可奈子. 十六ー十八世紀東アジア多国間関係史の研究. 京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20106>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	木村 可奈子
論文題目	十六ー十八世紀東アジア多国間関係史の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、序章、本論四章、終章、附編で構成される。</p> <p>序章では、前近代の東アジア国際関係史に関する研究が近年著しく増加しているものの、それらの多くが一国史の延長である対外関係史であり、二国間関係の叙述に終始していること、冊封体制論に見られるように中国中心の構図を免れていないことを指摘し、十六ー十八世紀の東アジア世界について、特定の国家を叙述の中心に置かない多国間関係史の具体的実相を明らかにすることを宣言する。なお、本論文のいう「東アジア」は一般に想起されるような漢字文化や儒教文化を指標とするような一定の枠をはめたものではなく、伸縮自在のエリアを指している。</p> <p>第一章「明の対外政策と冊封国暹羅ー壬辰戦争における暹羅からの借兵論を手掛かりに」では、シャム史研究において注目されてきた壬辰戦争（豊臣秀吉の朝鮮出兵）への暹羅（シャム）の「勤王出兵」の提案は事実ではないとして、あらためて借兵の提案に至るプロセスを検討することで、明にとっての冊封国暹羅の存在意義、十六世紀後半における国際環境の変容への明朝とアユタヤ朝の対応を明らかにしようとする。</p> <p>第一節「壬辰戦争と暹羅」では、暹羅使臣の朝貢の場に立ち会った朝鮮使臣の『赴京日記』などを援用してシャム王ナレースエンに出兵の意向がなかったことを突き止め、出兵提案にナレースエンの対外関心や世界認識を看取した従来の諸説を否定する。</p> <p>第二節「暹羅からの借兵論に対する同時代人の意見」では、両広総督でシャムの事情に明るかった蕭彦の文集『制府疏草』に収められた借兵への反対上奏、前礼部尚書于慎行の記述を取り上げ、シャムへの不信感が共有されていたことを指摘する。</p> <p>第三節「明と暹羅」では、両国の関係を万暦以前に遡って概観し、万暦六年（1578）にシャム語を専門とする暹羅館が漸く設置されたことからわかるように、それまで明にとって暹羅との関係は重みをもたなかったが、モンゴル・ビルマの脅威が明朝を暹羅重視に転じさせ、また、海寇林道乾討伐への協力など実際に暹羅の軍事力が期待されるようになり、それが壬辰戦争における兵部尚書石星の借兵策へとつながったとする。</p> <p>石星によって仕組まれた出兵提案は、万暦四十年（1612）の礼部主事高継元の上奏において暹羅が朝鮮・琉球と並ぶ「冠帯の国」と位置付けられているように、結果的には明人の暹羅観を大きく変える転機となったとして、もっぱら朝貢ー貿易という側面から語られてきた従来の明暹関係観に修正を迫っている。</p> <p>第二章「日本のキリスト教禁制による不審船転送要請と朝鮮の対清・対日関係ーイエズス会宣教師日本潜入事件とその余波」では、1643年のイエズス会宣教師の潜入事件を扱った山本博文（1995）・申東珪（2007）の先行研究の不備が、潜入事件後に対馬の</p>			

宗氏から朝鮮側に対して行われた不審船転送要請の契機となったイエズス会の布教活動や、朝鮮の対清関係を十分に踏まえていないところから生じていると指摘し、日本・朝鮮双方の史料をつきあわせることで、この事件に新たな照明を当てる。

第一節「宣教師の日本潜入への警戒と朝鮮への不審船転送要請」では、朝鮮と対馬の間でやり取りされた書契（韓国国史編纂委員会所蔵の宗氏文書）を用いて事件の詳細を跡付ける。1639年の第五次鎖国令により、キリスト教宣教師の入国の途はますます狭められたが、1642年にイエズス会の日本・中国巡察師アントニオ・ルビノらが潜入を敢行し、翌年ペドロ・マルケスら第二陣がこれに続いた。連年の事件により、幕府はキリシタンへの警戒感を強め、朝鮮政府に対して対馬を介して朝鮮近海の不審船を釜山の倭館に送るよう求めたが、これに対する礼曹参議の返書に、蛮船との関わりで「里菴甫島」への言及がある。これを架空の地名とする申東珪に対し、井上政重から宗義成に送られた「南蛮伴天連ちよぜい白状」に見える「りやんほう」と同定できるとする。「ちよぜい」とは、第二次潜入団の一員ジョゼッペ・キアラであり、彼の供述から、中国内地にいたイエズス会士がマカオの同胞に対して「りやんほう＝リャンポー」（寧波の双嶼）経由での入国を勧めていたことが明らかになった。マルケスらの逮捕の翌年に朝鮮に漂着した広東船は、対馬を経て長崎に送られたが、その直前に長崎に到着していた広東船の乗員黄五官らがキリシタンであると摘発された。井上から宗義成に送られた黄の供述書には、朝鮮経由で日本に渡ろうとしている宣教師がいると述べられていた。こうした事件の連続により、幕府は朝鮮へ不審船送致を働きかけたが、朝鮮は日本の圧力を清朝に伝えることで、城郭修築の要求を認めさせようとしたのである。

第二節「以後の朝鮮の漂着船処置」では、1647年以後の漂着船に対する朝鮮政府の措置について論じる。同年に漂着した鄭芝龍配下の商船の措置をめぐる議論が起きた。前年に南明政権の日本乞師の情報を清朝に伝えることで、供出を要求されていた運米船を国防に使うことが認められていたので、今回日本に船を引き渡せば清側の疑念を招くと懸念する声がある一方で、反清感情から日本送致を主張する意見もあったが、仁祖は勅使と相談の上で日本に転送するという折衷案に決した。また、ポルトガル使節の船が長崎に来航したこともあって、幕府は朝鮮政府に対して沿岸警備の強化を要請したが、その後不審船は日本に送られず、漂着者は勅使に引き渡された。しかし、上奏中で漂流船不送致により日本の恨みを買ったと述べて、清の譴責を受けることとなった。

朝鮮が自発的に不審船を送ったのは、1644年の明船の一例だけであった。1653年のオランダ人ハメルスの漂着時には日本転送は議論されておらず、彼が1666年に五島に脱走すると、幕府に不連絡を責められた朝鮮政府はやむなく残りのオランダ人を引き渡した。山本博文はこれをとらえて引き渡しの慣行が生きていたとするが、翌年に漂着した鄭経配下の商人は清朝に引き渡されており、二年後の漂着船は地方官により長崎に送られたが、中央政府は表向き関知していない。朝鮮は清との関係を常に顧慮して漂着船に

対処していたのであり、山本の言う「日朝合同の沿海防備体制」が成立していたとは言いがたい。また、朝鮮政府が明船一隻を日本に送ってキリシタン禁制に協力する一方で、清に他の漂着者を送っているのは、清と日本が弾力的な国際関係を維持していたことを示すとする申東珪の議論は、1650年の清の譴責以後は成立しないとする。

第三章「三藩の乱時期の朝清関係と日本」では、先行諸研究では日本から得た情報が朝鮮の対清関係に与えた影響が検討されていないことを指摘し、朝鮮・日本・清の史料を用いてその解決を目指す。

第一節「三藩の乱の勃発と情報収集」では、朝鮮での情報収集の開始、日本における情報収集について述べた後、当時、城郭修築をめぐって朝清間に相互不信が生じていたことを指摘する。1674年、清の大通官（通訳）張孝礼から、朝鮮側に対して城郭修築・鳥銃製造の意図があるかどうか探られた時、この機会に国防の強化を図ろうとする動きの一方で、清朝の嫌疑を招くべきではないとする慎重論が出された。朝鮮は台湾の鄭經との通信を疑われていたが、実際に彼と通じて清と断交することを主張する者がいて、鄭經への使者派遣をめぐって激論が闘わされていたのである。

第二節「対馬からの書契と清への通報」では、1675年に幕府の指示を受けて北京の情報を探るべく対馬から書契を送られた朝鮮政府の対応を取り上げる。これを契機に日本経由で鄭經と連携すべしとする意見と、清朝に「倭情」を通報すべしとする意見が対立したが、後者が優勢となり、呉三桂に呼応したブルニの反乱平定を祝う使者に託して北京に倭情咨文が送られた。朝鮮は対馬からの書契には謝意を表していたが、この咨文では日本の脅威を強調し、防備の不足を訴えていた。清朝側はその意図を疑いつつも、朝鮮に対して対馬が呉三桂に加担しないよう働きかけることを命じた。これに対して、朝鮮側は対馬に友好的な書契を送るだけで、清朝の指示には一切言及しなかったが、清朝には対馬に清の威徳を宣揚したと伝えた。

第三節「朝清間の摩擦の高まり」では、両国の摩擦の原因を具体的に論じる。当時、両国の間には、三藩・日本との関係以外にもいくつかの争点が存在していた。清からの銅銭輸入（1675）、中国の野史の朝鮮に関する「曲筆」（1676）等の問題である。銅銭輸出も、曲筆に対する「弁誣」も認められず、逆に禁止されている史書を購入したことが咎められたが、この時点までは清朝の態度は寛容であった。しかし、清朝が強硬な姿勢をあらわにしたのが、1680年に国境の鴨緑江を渡って木皮を採集していた朝鮮人の逮捕事件であった。事件を調査する勅使が派遣され、礼部は朝鮮に罰銀を課すことを主張した。罰銀を免除した康熙帝に対して送られた謝恩使の携えた表文で、勅文には記されていた朝鮮国王の諱が避けられていたことが問題となり、今度は罰銀が課された。反乱が終息に向かっていたために、清朝は制裁の方向に舵を切ることができたのである。

第四節「鄭克塽の降伏以降の朝清関係と日本」では、三藩の乱終結後、日本の存在が朝清関係に与えた影響を論じる。1683年に鄭克塽が降伏した後、唐船から得た情報（鄭

経の北上、清朝による朝鮮譴責)について尋ねる書契が朝鮮に届き、その内容が巷間に漏れて騒動になった。唐船が伝えた情報は「唐船風説書」には存在しないが、対馬藩の『江戸藩邸毎日記』から、幕府儒官の人見竹洞が清の朝鮮譴責について藩邸に確かめたところ、対馬側からは、そのような情報はなく、朝鮮にも問い合わせたとの返答があったことが知られる。ここから、朝鮮譴責説を知った幕府が対馬に確認したために朝鮮に書契が送られたことが判明する。朝鮮は書契の存在を清側には伝えなかったが、1684年に大学士の明珠が朝鮮使節に対して書契の有無を尋ねたのは、民間の騒動が清に伝わっていたからである。翌年には『大清一統志』編纂用の地図作成のために鴨緑江付近を調査中の官人が人參盗掘のために渡江した朝鮮人に銃で狙撃された。清側は国王の責任を問い、罰銀二万両を課した。今回の問責は極めて厳しく、朝鮮が日本の「脅威」を捏造したことが公式に断罪されたのである。

朝鮮は三藩の乱に関する日本の動向を対清外交のカードとして戦略的に利用したが、かえって逆効果であった。以後十九世紀後半の高宗代まで、日本情勢については通信使派遣の事後報告を例外として、自発的に報告することがなくなる。

第四章「冊封使李鼎元の琉球認識と清・琉球・日本・朝鮮四国の国際関係―柳得恭手稿本『燕臺再游録』をもとに」では、1609年の島津氏の侵攻によって琉球が日本に服属した事実をめぐる中国・朝鮮知識人の認識について論じる。朝鮮ではこの事実を把握し、清朝の琉球冊封使も日本の支配の実態に気づいていたが、見て見ぬふりをしていた。清朝と国交を持たない日本を東アジア国際関係史の埒外に置く冊封体制論を批判する夫馬進(2008)は、中国と日本、朝鮮と琉球の国交杜絶こそが琉球の存在を問題化させず、東アジア四国の安定した国際関係を形成させたとして、清人の立場からは琉球の日本服属を知っていても公言できなかったと指摘し、その例として1800年の冊封副使李鼎元を挙げた。しかし、李鼎元と朝鮮燕行使柳得恭との会話を記録する『燕臺再游録』の流布本(遼海叢書本)は、李の琉球認識を知るうえで決定的な部分を欠いており、手稿本を用いることで李の琉球認識とその背景となる当時の四国関係を再考する。

第一節「柳得恭と李鼎元」では、二人の交友関係を、朝鮮の北学派として著名な朴斉家らを含む士人ネットワークの中に位置づける。柳得恭は朴斉家とともに1790年に初めて北京の地を踏み、1801年にもやはり朴とともに燕行使団に加わった。その時の記録が『燕臺再游録』である。一方、李鼎元が従兄の李調元とともに交流した朝鮮人の中に柳得恭の叔父柳琴がいた。また、李鼎元は1778年の燕行使に随行していた朴斉家・李徳懋と交流し、柳得恭と1790年に知り合う以前から文通する仲であった。

第二節「李鼎元と歴代冊封使の波上寺銘文に対する考証」では、夫馬進も取り上げた波上寺にある銅製の旛の銘文に対する歴代冊封使の考証について振り返る。1683年の冊封使汪楫はこの銘文の「元和二年壬戌」について意味不明としたが、1756年の周煌ははっきり日本年号と指摘して、この年は元和八年(1622)に当たり、汪の「二年」

を誤りとした。しかし、汪は本来「天和二年壬戌（1682）」であったものを元和と誤ったのだとする原田禹雄（1997）に同意する夫馬は、天和であることを明らかにすれば清朝が琉球の日本服属を知らずに冊封し続けたことになるので、冊封使たちは「事実」を知ることを回避したのではないかと指摘した。周煌の記述を承けて、李鼎元が『使琉球記』の中で「琉球がむかし日本に臣属していた」証拠であるとして、近時のことに触れないのもその表れであるとするのである。

第三節「柳得恭と李鼎元の琉球に関する問答」では、李鼎元と、周煌の『琉球国志略』を読んでいた柳得恭との会話を手稿本によって紹介し、遼海叢書本では脱落している、柳と李がともに琉球の「倭子」所属を認めている部分を取り上げる。夫馬は、遼海叢書本によって、李は琉球の現状を知りながら、柳に直接的にそのことを尋ねなかったとしたが、手稿本からは、李と柳の間には、琉球が過去でなく現在日本に服属しているという認識が共有され、しかも他人もいる場で公言されていたことが分かる。その一方で、その事実を「過去」のことに強調した『使琉球記』の記述に意図が感じられるとした夫馬の推測の正しさが確かめられた。

第四節「沈黙と暗示—『使琉球記』と『琉球訳』」では、豪胆な李鼎元にして『使琉球記』では服属に言及できなかったが、琉球語を採録した『琉球訳』において「琉球曰倭急拿」と、「倭が急いでとらえた」とも読める漢字転写を行っていることに注目する。「倭急拿」自体は服属以前の明代の冊封使の記録にもすでに見えているが、琉球そのものに倭急拿を当てたのは『琉球訳』が初めてであり、そこに李が日本との関係を暗示しようとした可能性をみている。

二人の会話の中で服属に先に言及したのは、柳得恭であった。彼は李鼎元を通して、清側がどこまで琉球と日本の関係を認識していたのか探ろうとしたのだと論を結ぶ。

「終章」では、四章の内容をまとめ、既存の中国を中心とした東アジア国際体制論や一国の対外関係史を基礎とした東アジア国際関係研究からは見えない、国家間の複雑多様な関係の一端を明らかにしてきたことを確認し、さらに個別具体的な事例研究の必要性を説き、今後の課題に触れる。

附編「柳得恭『燕臺再游録』の諸本と遼海叢書本のテキスト問題について」は第四章の補編である。金毓黻が編集し、1934年に刊行された遼海叢書本と韓国・台湾に所蔵される四つの手写本を比較し、韓国国立中央図書館所蔵の柳得恭『冷斎書種』に収録された『燕臺再游録』が柳の手稿本と考えられること、ソウル大学校奎章閣所蔵の二本は中央図書館本に発すると考えられること、台湾師範大学本は遼海叢書本と誤脱を多く共有し、きわめて近い関係にあり、台湾に渡った経緯については不明ながら金毓黻の手を経た可能性が高いことを指摘し、満州国の奉天図書館副館長だった金の日本への配慮から日本関係の記事に改変・削除が加えられた遼海叢書本ではなく、中央図書館本を使うべきだとする。

（論文審査の結果の要旨）

近年、東アジアの外交関係史は時代を問わず、流行しているといっていよう。その中でしばしばいわれるのが、中国中心の歴史観からの脱却である。たとえば、宋代史研究会が2009年に刊行した論集の『「宋代中国」の相対化』という書名にそうした主張が示されている。しかし、政治的・軍事的に弱体であった宋朝とは異なり、明清代について中国中心史観を脱却するのは困難である。著者が、十六―十八世紀の東アジアにおいて、一国中心の延長線上にある対外関係史や、中国と朝貢国の関係のみに着目して東アジアの国際秩序を論じる研究を批判し、中国をも東アジアの中の一つのアクターとして見る多国間関係史の構築の必要を訴える所以である。

その際に、鍵となるのが朝鮮の存在である。近代以降の朝鮮をめぐる国際関係史研究の充実ぶりに比して、前近代のそれは今後開拓されるべき余地をおおいに残している。むろん、処女地というわけではなく、古典的なすぐれた研究は存在するし、夫馬進が朝鮮使節の北京行の記録である「燕行録」という大史料群の価値を明らかにして以来、韓国・中国では燕行録を用いた研究書が多く出版されるようになっている。韓国の修士論文・博士論文にもそうしたものを複数見かけるので、しばらくブームが続くのだろうと想像する。しかし、燕行録の史料としての豊かさや面白さによりかかったり、そこに漢字文化圏ののどやかな「文芸共和国」を見出したりに終始するようでは、エピソード的な歴史叙述しか生まれないであろう。

韓国で約二年間の研鑽を積んできた著者による本論文もまた、燕行録をはじめとする朝鮮史料なくしては成り立たないが、上記のような研究とは一線を画し、朝鮮・中国・日本・琉球そしてシャム間の緊張関係あるいは平和の中での摩擦を主題に据える。さらに、日本・中国の史料を合わせ見ることで、著者のいう一国中心の延長線上の対外交渉史研究に見られる思い込みを訂正する。壬辰戦争（秀吉の朝鮮出兵）時のシャム使節の援兵提案に当時のアユタヤ王の対外関心・外交思想を読み取ろうとしたシャム史側の研究に対して、朝鮮使節の記録から借兵案は中国側の事情に出るものであることを明らかにした第一章、江戸初期に不審船取締りのための「日朝合同の沿海防備体制」が成立していたとする日本史研究者の議論をソウル所蔵の対馬宗家の関係文書を全面的に用いて否定し去り、あわせて鎖国直前の在華宣教師の動きを明るみに出した第二章は、その鮮やかな成功例である。

本論文でいま一つ特筆すべきなのは、史料を嗅ぎ当てる鼻のよさである。前述の対馬宗家文書の使用もそうだが、第四章にもそれは発揮されている。かつて琉球に冊封使として赴き、表向きは隠蔽されていた琉球の日本服属に気づいていた李鼎元と、琉球と国交はなかったが周煌の『琉球国志略』を読んで関心を有していた朝鮮の柳得恭の二人が1800年に北京で出会う。その際琉球をめぐるやり取りが両者の間で交わされたことは夫馬がすでに「遼海叢書」に収録される柳の『燕臺再游録』を用いてとりあげている（『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』）。しかし、この流布本に脱落があることを、著者は韓国・台湾の諸写本を比較対照することで突き止め、実は二人の間で琉球の服属について語られ

ていたことを明らかにした。著者によれば、朝鮮の外交史料として多用されてきた『同文彙考』にも様々な問題点があるという。第二章で示された宗家文書収録の書契と『同文彙考』収載の書契の違いをみてもそれは納得されることだが、おそらく著者は今後もすぐれた嗅覚によって通行史料の欠陥を次々に発見してゆくのではないかと予想する。

本論文の最長編である第三章では、三藩の乱時およびその直後の朝清関係の緊張が活写される。「日本の脅威」を背景に、それまで清朝によって禁じられていた城郭の修築が朝清間で再々話題に上る。朝鮮がどこまで本気だったのかわからないのがもどかしいが、これまで部分的に取り上げられてきたこの時期の朝清関係を総合的に叙述した点は大きな貢献である。また、三藩の乱の間に清の朝鮮に対する態度は寛容から厳格に転じ、朝鮮側はそれ以後これまで外交カードに使ってきた「倭情咨文」を十九世紀後半の高宗期まで通信使派遣の事後報告としてしか用いなくなるという指摘は、日本を介在させない新局面における朝清関係の外交のありようへと読者の関心をいざなう。これに加えて対馬とその先にある幕閣の動きまで俯瞰的にとらえた本章は、著者のいう多国間関係史叙述の一つの達成といえよう。

しかし、朝鮮・日本そして中国の史料を一人の手で使いこなすのは容易なことではない。それぞれの史料の特質や癖をつかむには相当の時間と努力を必要とする。著者の史料に対する博覧と俯瞰力、関連分野の研究に関する情報収集力は若手研究者の中では飛び抜けているが、漢文史料の釈読・翻訳に対する研鑽不足は、本論文とくに第三章に露呈し、ほぼ論旨には関係しないとはいえ、雄編の瑕疵となっている。

また、著者は序章で「東アジア」という語を伸縮自在に用いると宣言し、第一章でシャムと明の関係をとりあげているが、国と国との関係でとらえる限り、結局は著者が批判する冊封体制論に包摂されかねない。今後、ベトナムにもフィールドを広げて事例研究を積み重ねる中で、著者のいう一国を中心としない多国間関係史はさらに複雑かつ豊かなものになっていくことが期待されるが、その一方で、現段階では専ら国の中心―中央政府・首都の目線で叙述されているのが気になる。本論には、境界で接する人々や勢力（漂着船の乗組員、清朝の権威を笠に着た朝鮮人通訳官、対馬宗氏など）、政府の決定と反対を向いている人々（朝鮮の北伐論者）が登場するものの、その存在は重視されていない。著者には、東アジアというアリーナの中で繰り広げられる多国間の駆け引きを見るだけでなく、それぞれの国の中のプレイヤーたちに応分のまなざしを注ぐことを望みたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2017年2月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。